熊野古道・紀伊路

2007.11.23～24

和泉府中から山中渓、今回も市街地中心のコース。

11 月 23 日

6：15　地下鉄「平針」出発
6：36　伏見着
6：40　伏見発
6：43　名古屋

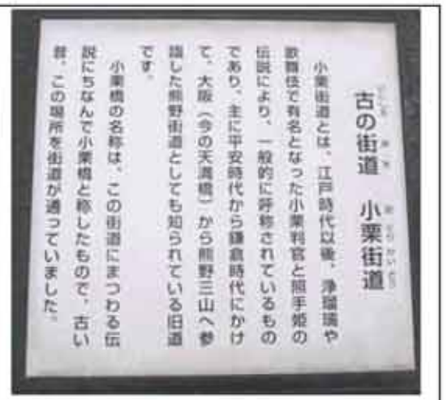
7：00　近鉄アーバンライナー
9：08　近鉄「鶴橋」着
9：17　ＪＲ「鶴橋」発
9：22　ＪＲ「天王寺」着
9：34　ＪＲ「天王寺」発
9：55　ＪＲ「和泉府中」着

10：00　出発
10：05　泉井上神社
　　神社を出たところで、現在地の確認をミスって約 30 分ロス
10：50　井ノ口王子跡
11：05　小栗橋
11：20　イズミヤで弁当を買って昼食（約 40 分）
12：20　積川神社鳥居
12：50　道ノ池・道しるべ地蔵

井ノ口王子跡（妙福寺）

泉井上神社の中「髪之神」

小栗橋



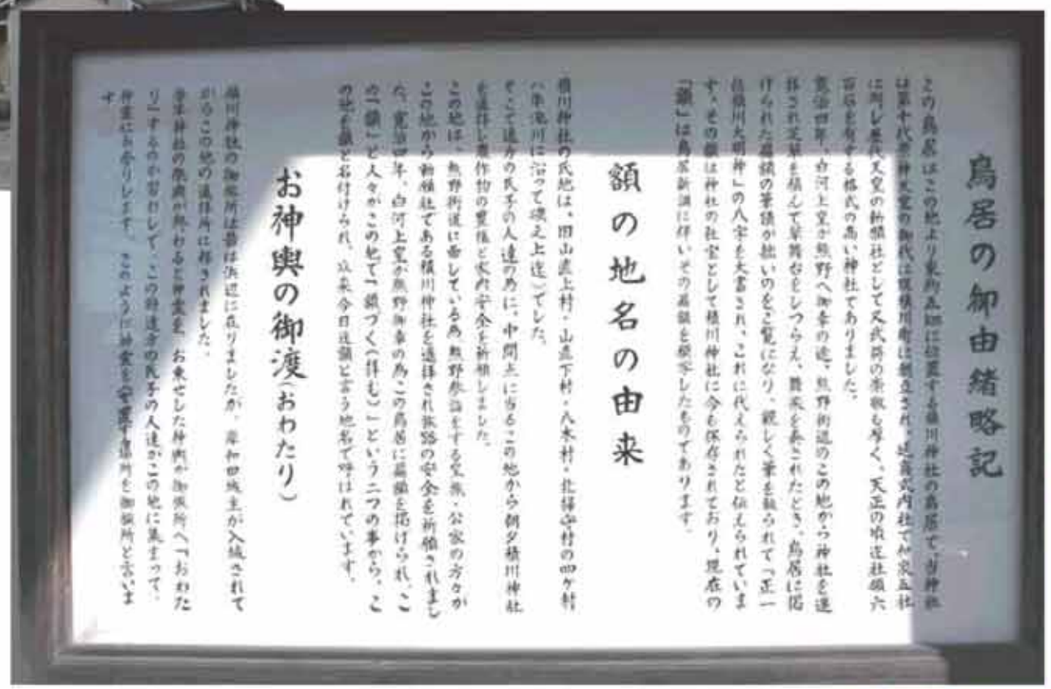
古の街道　小栗街道

小栗街道とは、江戸時代以後、浄瑠璃や歌舞伎で有名となった小栗判官と照手姫の伝説により、一般的に呼称されているものであり、主に平安時代から鎌倉時代にかけて、大阪（今の天満橋）から熊野三山へ参詣した熊野街道としても知られている旧道です。

小栗橋の名称は、この街道にまつわる伝説にちなんで小栗橋と称したもので、古い昔、この場所を街道が通っていました。

ちょっと早めの昼ご飯

積川神社鳥居



鳥居の御由緒略記

この鳥居はこの地より東約五町に位置する積川神社の鳥居で、当神社は第十代崇神天皇の御代は「積川郷」は創立され、延喜式内社で神宮五社に列し歴代天皇の勅願社として又武将の崇敬も厚く、天正の頃迄社領六百石を有する格式の高い神社でありました。
慶安四年、白河上皇が熊野へ御幸の途、熊野街道のこの地から神社を遥拝され芝草を植えて早舞台をしつらえ、舞楽を奏されたとき、鳥居に掛けられた額の筆跡が拙いのをご覧になり、親しく筆を執られて「正一位積川大明神」の八字を大書され、これに代えられたと伝えられています。その額は神社の社宝として積川神社に今も保存されており、現在の「額」は鳥居新調に伴いその複製を模写したものであります。

額の地名の由来

積川神社の氏地は、田山庄上村・山庄下村・八木村・北條宮村の四ケ村（集荷川に沿って東之上迄）でした。
そして遠方の氏子の人達の為に、中間点に当るこの地から朝夕積川神社を遥拝し農作物の豊穣と家内安全を祈願しました。
この地は、熊野街道に面している為熊野参詣をする交通・公家の方々がこの地から御願社である積川神社を遥拝され旅路の安全を祈願されました。寛治四年、白河上皇が熊野御幸の為この鳥居に額を掛けられ、この「額」と人々がこの地で「願づく（拝む）」という二つの事から、この地を額とお付けられ、以来今日迄額という地名で呼ばれています。

お神輿の御渡（おわたり）

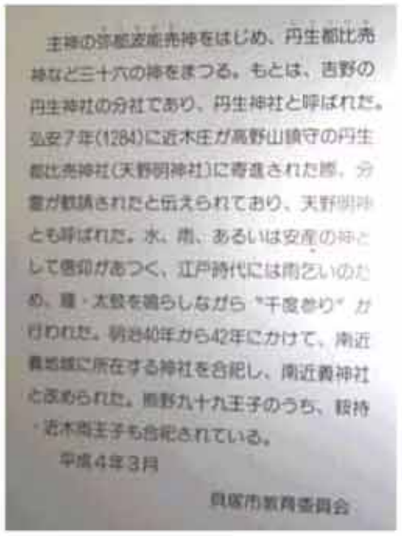
積川神社の御祭所は当初には在りませんでしたが、幸和田城主が入城されてからこの地の遥拝所に移されました。
幸革神社の例祭が終わると神輿を、お乗せした神輿が御祭所へ「おわたり」するのが習わしで、この時遠方の氏子の人達がこの地に集まって、神輿にお参りします。このように神輿を安置する場所を御祭所と云います。

堤の道（古道）は行き止まり

13：05　麻生川王子跡
　　三和製作所敷地内に祠はあるが、多分関係ない
13：20　半田一里塚
13：55　石才会館・牛神
14：05　長谷川ノ坂
14：15　ジャスコで休憩（30 分）
14：50　南近義神社
15：10　貝田町会館（鶴原王子跡：何も無い）
15：45　佐野王子跡
16：10　ホテル：ラマダ関西空港着
　　ホテルで教えてもらった和食の店「味彩」で夕食
　　早々と（多分 9 時前後）就寝。

牛　神

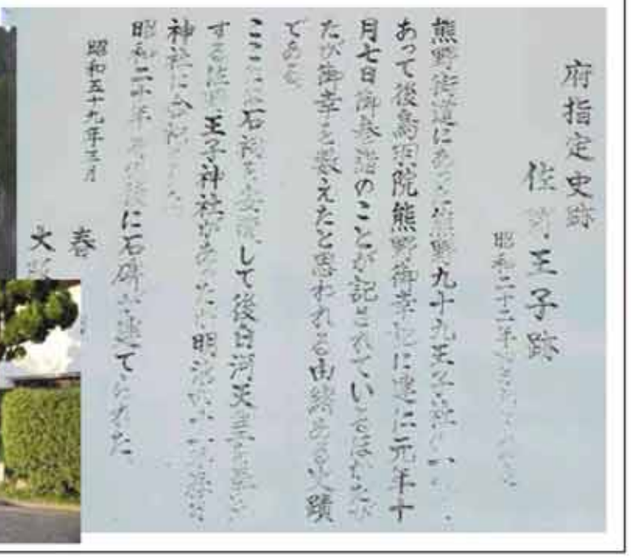
南近義神社



長谷川ノ坂

部屋から見た夕陽

佐野王子跡



11 月 24 日

7：55　ホテルで朝食後、出発
　今日は時間に余裕があるのでのんびり歩くことに

8：10　市場の道標

8：50　八丁畷地蔵

9：00　樫井(籾井)王子跡
　いづみモータースの中庭に石碑が有るらしいが入れない
　塙団右衛門の墓
　この辺りから大坂夏の陣古戦場

9：05　淡輪六郎兵衛の墓

9：15　夏の陣：樫井古戦場跡碑

9：25　一岡(一丘)神社（海会寺跡）

9：45　厩戸王子跡

10：00 泉南市営古代史博物館(見学 20 分)
　建物は立派(過ぎる)。

市場の道標（すぐは“真っ直ぐ”の意）

安松八丁畷の石地蔵

石造のほこらのなかに安置されているこの地蔵は、いまお顔は摩滅がきびしくもとのものではないが、そのほかは原形のままで台石共に和泉砂岩の一石で、向かって右に正平十八年（一三六三）の年号がきざまれてあって、いまから約六百三十年前のものであることがわかる。

どのような理由でつくられたものか知ることはできないが、この街道を通る多くの人達をむかえ、また見送っている。

むかし大阪の人が途中でおいはぎにあいかけてこの地蔵のところにかくれてその難をのがれたということから、人々は信仰する人が絶えず、その霊験はたちまちあらわれたという石地蔵がくずれては、いまも残されている。

一時、民家に移されていたが大正の初め頃にこの旧位置におかれたという。

塙 団右衛門の五輪塔

慶長20年（1615）の豊臣方と徳川方が戦った大坂夏の陣の樫井合戦で討死にした 塙 団右衛門直之の五輪塔である。団右衛門は足強剛勇の人で加藤嘉明に仕え、朝鮮の役で軍功をあげ、名を知られたが、関ヶ原の戦い（1600年）以後浪人して僧となり快斗と号した。

大坂冬の陣（1614年）が起きると豊臣方に属し、大坂城に入城した。慶長20年4月、夏の陣がおこると、豊臣方は徳川方の紀州和歌山城主浅野長晟の軍と戦うべく泉州に進んだ。

団右衛門は先鋒隊をひきいて4月29日早朝 熊野街道を南下し、待ち構える浅野軍に突入した。安松、岡本、樫井で激戦が展開されたが、大坂方は敗れ、団右衛門はこの地で討死にした。ときに48歳という。

団右衛門を討ったのは土田宗兵、亀田大隅あるいは八木新左衛門などの説があり一定しない。

五輪塔は寛永8年（1631）に紀州の士小笠原作右衛門が建立し、石灯籠は八木新左衛門の孫が奉納した。

250回忌（1868）には団右衛門の子孫の樫井氏が補修し周囲を整え、当地の観音寺に位牌を納めた。以後当地の人たちにより守られている。

淡輪六郎兵衛の宝篋印塔

慶長20年（1615）、大坂夏の陣がおこり、豊臣、徳川方が最初に激突したのが樫井合戦である。

この石塔は、豊臣方の武将としてこの地で討死にした淡輪六郎兵衛の宝篋印塔である。

淡輪氏は古くから和泉国淡輪（現岬町）の豪族であった。六郎兵衛の姉は豊臣秀次の側室の小督局で、その子お菊も夫とともに豊臣方として戦った。

慶長20年4月、徳川方は全国の大名に大坂城を攻撃するよう命じた。

これに対して、豊臣方の一軍は徳川方の紀州和歌山城主浅野長晟の軍と戦うべく泉州に進んだ。

六郎兵衛はその先鋒隊となり4月29日早朝、塙団右衛門とともに熊野街道を南下し、樫井で待ち構える浅野軍に突入し乱戦の中で討死にした。

この宝篋印塔は寛永16年（1639）25回忌にあたり淡輪氏の末裔の本山氏が淡輪にて石材を整えて建立した。その後も当地の人たちにより守られてきた。

古代史博物館

ネット沿いの里道が本来の古道

11：00　そば処「のこのこ」で昼食（30 分）

11：50　信達一ノ瀬王子跡
12：20　林昌寺（この付近に長岡王子があったらしい）
13：05　石の鳥居
13：15　琵琶懸け
　　ガイドブックでは通行不能となっていたが、通れるようになっていた。
13：20　地蔵堂王子跡
13：30　馬目王子跡
13：35　紀州街道入口
13：45　山中神社
13：55　ＪＲ「山中渓」駅
　　14：02 の列車で難波に向かう
　　黒門市場で干し数の子探しの後、蓬莱なんば戎橋筋本店で夕食
18：00　近鉄アーバンライナーで帰名

信達一ノ瀬王子跡

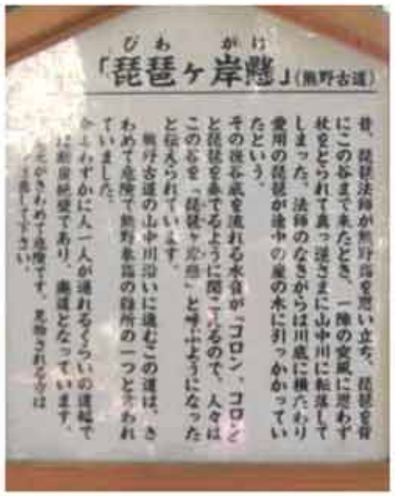
林昌寺

今は使われていないらしい地蔵堂(由緒あり気)

地蔵堂王子跡

馬目王子跡

石の鳥居



山中神社に合祀された馬目王子